歴研おかやま
okayama history research society

第３７号
令和５(2023)年12月1日発行
会　員　募　集　中
年会費　3,000 円
10月以降入会 1,500 円

倉敷代官所・浅尾陣屋襲撃事件

ー大橋敬之助・立石孫一郎について　天保４年～慶応２年（1833～1866）ー

会員　*工藤　博*

二つの名を持つ男

動乱の幕末、倉敷村に大橋敬之助・立石孫一郎という二つの名を持ち、文武両道に秀で、不正を憎む正義の倒幕町人志士がいた。彼は百数十人の隊士を引き連れ幕府の地方行政府倉敷代官所、また総社の親藩浅尾藩陣屋を襲撃する騒乱を起こし、のちに現・山口県光市の橋上で謀殺される数奇な半生を送った。

大橋敬之助・立石孫一郎は播磨国佐用郡上月村（現・兵庫県佐用町上月）の勤王派の大庄屋・大谷家に天保４年（1833）に生まれ、母の実家・美作二宮村（現･津山市二宮）立石家の養子となるが、間もなく倉敷村の名家大橋家、大橋平右衛門正直の養子に迎えられ、長女慶を娶り別家して西大橋家を立てる。

下津井屋事件　元治元年（1864）12 月 18 日

安政６年（1859）、大橋敬之助 31 歳は倉敷村の年寄役に選ばれた。この頃は大凶作で代官所から「津留」が出されていた中､豪商下津井屋吉左衛門･寿太郎父子とその一派の豪商、大原家・小山家らはひそかに米・綿・菜種・煙草他を買占め積み出しぼろ儲けを企むも露見し、村人は怒り不正を追及する。年寄役大橋敬之助が訴えを受理し倉敷代官所（現・倉敷美観地区アイビースクエア）代官大竹佐馬太郎へ元治元年（1864）10 月提出。証拠

歴・研・展・望

今年度の総会で、岡山大学医学部教授、和田先生から「健康寿命を延ばすには」という講演を拝聴した。また、百歳まで絵を描き、文化勲章を受賞された女流画家、小倉遊亀さんは、「何十代の絵が最も素晴らしいか？」と聞かれ「70 代の絵が最もいい」と答えたと。

平均寿命が延びて、人生 100 年時代と言われるようになった。大事なのは余命寿命をいかに健康で過ごすかである。最も充実した年代と考えられる 70 代もすでに半分過ぎた。老いが忍び寄るのを感じるようになってきた。50 代、60 代は若さの勢いの延長線上で過ぎてきた感じがするが、今後は健康維持のために何らかの工夫が必要と感じる。

105 歳まで医者として活躍された日野原先生の著書の中に、「子供時代は学校が、社会人は社会が教育してくれる。老人は自分を自分で教育するしかない」という件（くだり）がある。また､著名な実業家の著書に｢健康は１日にしてならず｣という件があり、納得せざるを得なかった。これまで何をしてきたか、これから何をすべきか、自問自答のこの頃である。

何事にも歴史があり、その終着点が現在である。これまで、多くの先人達が切り開いてくれて今日がある。「過去にとらわれないために過去を学ぶ」と言われているが、現在を生きる年配者に生き甲斐を示唆するような研究発表をも期待したい。

（楠　敏明）

の帳簿もあり下津井屋父子は代官所に検挙されたが、取調べ中のわずか４日後、奇怪なことに代官が突然桜井久之助に変わり無罪として釈放、訴えも却下。釈放された下津井屋吉左衛門は「なぜ差し込んだ。俺は倉敷の生え抜きだ、お前は大橋家の養子だ」「大橋の養子は悪党の親分か」等と激しく罵る。大橋敬之助はいたたまれず養子縁組を解消し倉敷から消える。

訴えから２ケ月後の深夜、黒覆面士の一群（一説には９人）が下津井屋に乱入し手代１人を殺害、下津井父子の首をはね家屋に火を放ち立ち去る。父子の首は小山家側の清音橋下に打ち捨てられる。当日の主犯は不明だったが、５年後に仲間割れから大橋敬之助と判明する。

第二奇兵隊入隊・脱走　慶応２年（1866）４月５日

大橋敬之助は大阪に行き、かつて勤王派同志を殺害した新撰組を襲うも成功せず。それ以来新撰組に追われ、香川県直島の実家大橋家塩田に身をひそめる。

襲撃からおよそ２か月後の慶応元年（1865）２月頃、倒幕を担う長州高杉晋作の奇兵隊へ入隊する。この時から母方姓の立石孫一郎を名乗り、新しく結成された第２奇兵隊小隊長になる。

翌慶応２年（1866）、隊士内では倒幕積極派と消極派間で隊の在り方に対する対立議論があり、一般隊士の不満が鬱積していたところへ、隊士と岩国藩の兵士とのささいな紛議を内々穏便に収拾しようとした隊幹部への不満が暴発した。４月５日（注１）、積極派の立石孫一郎を頭とする第２奇兵隊隊士 100 数十人（注２）が対抗する隊幹部１人を殺害、１人を捕縛し陣営を脱走。脱走兵士たちは藩庁に訴えに行くと称し、柳井市遠崎船着場から５艘の船に分乗して、西にある山口政府に陳情に向かっていたが、船は藩庁とは逆方向の東、倉敷代官所へ向きを変え一路航行した。この裏には、理不尽な倉敷代官所に対する正義の熱血漢立石孫一郎の執拗な憎悪があった。この行為は明らかに軍紀違反であり、長州藩からは藩の名に値しない暴徒扱いになった。

倉敷代官所襲撃　慶応２年（1866）４月 10 日

脱走兵は航路で、４日後の午後４時頃倉敷市西之浦到着。深夜の道を 8Km 倉敷代官所まで進み、４月 10 日早朝襲撃する。代官所の襲撃は午前４時頃の他、午前５時頃、午前６時頃の説がある。脱走兵は代官所の四方を包囲、各所の塀を押し倒し侵入し宿直・使用人を殺害、御役所・御部屋に放火した。また牢屋内にいた囚人７人を連れ出し、のち行動をともにする。この時、代官桜井久之介は第二次長州戦争準備に数人を連れて広島出張で不在、代官所内には武士７人、武士以外の宿直員 24 人がいて、９人が死亡した。

襲撃後の朝８時頃、約 200m 先の高札場に２枚の立札を掲げ代官所糾弾・焼き討ち理由を大衆に公示、のち休息に近くの観龍寺に向かう。現在も寺の山門鴨居には興奮した隊士の槍の突き痕が残っている。脱走兵の幹部は、庄屋大原与兵衛と大橋平右衛門に寺への出頭を要請、年寄役が大原家の代理で出向く。そこで初めて襲撃部隊の指揮官が大橋敬之助であることを知る。軍資金を要請され大原与兵衛 700 両、小山安右衛門 700 両、大橋平右衛門 1000 両をさし出す（さし出し額には異説あり）。脱走兵は午後３～４時ごろ倉敷を去り、西坂（倉敷市）をへて浅尾藩（現･総社市井尻野付近）の宝福寺に移動、２泊する。

倉敷代官所記念碑

総社浅尾藩陣屋襲撃　慶応２年（1866）４月 12 日

浅尾藩は親幕派の蒔田宏隆の領地で、浅尾陣屋（現・総社駅北 500m）を構えている。小藩ながら蛤御門の変で長州を散々痛めつけた筋金入りの反長州勢力。立石孫一郎は滞在した宝福寺で、かねて連絡をとりあっていた同志に倒幕挙兵に向け陣屋襲撃の参加を呼び掛けたが、参加者はなく結集に失敗。浅尾藩、備前藩からは宝福寺からの立ち退きを要求され、長い交渉ののち出発することを約束、脱走兵は伯耆へ行くと称し２隊に別れて寺

を去る。

浅尾藩は安堵し、陣屋には酒食が供される。脱走兵は４月 12 日深夜、浅尾陣屋へ夜襲をかける陽動作戦をとる。本隊を高梁川で飲酒休息し油断させ、別動隊が浅尾陣屋を襲撃して合図の大砲音を響かせ、本隊と合流しなだれ込んだ。陣屋へは先陣の別動隊数十人が南の追手門から、合流した本隊は東から攻め込み、不意を突かれ陣屋側は 13 棟焼失、敗北を喫した。陣屋内には武士 20 名、その他を入れると数十名がいたと推測される。浅尾藩の死傷は討死 14 人、手負い７名の計 21 人、脱走兵側死者５人。この時、藩主浅尾宏孝は京都勤番中で不在だった。脱走兵は浅尾陣屋襲撃後の翌朝、陣屋に立てこもり岡山藩などの攻撃に備えるが、備前藩 2000 人、備中松山藩 100 人、広島幕府軍艦 700 人の大包囲網を受け戦闘は不利と判断、期待した同志による倒幕蜂起もなく、一戦も交えず撤退する。

浅尾陣屋土塀跡

長州退却・謀殺　慶応２年（1866）４月 26 日

撤退した脱走兵は、清音村・水江村で高瀬舟５艘借り受け東高梁川を南下する。南下する東高梁川では亀島（倉敷市）付近で幕府軍との銃撃戦にあうなどで、脱走兵たちには逃亡四散する隊士もいたが、立石孫一郎を含む多くの隊士は逃亡に成功、船便を求めて長州へ帰り島田川（山口県光市）の川口、浅江村にひそかに上陸した。長州藩では暴徒となった脱走兵の猪突的な蜂起に激怒、隊の統制をとるために一味に確固たる態度で臨む召捕りの表明がなされ、藩兵の厳しい探索が取られた。

浅江村は毛利清水家の領地で、同家の祈願寺清鏡寺がある。清水家当主の清水美作は第２奇兵隊の総督である。上陸した立石孫一郎は隊士１人を連れ清鏡寺に入り、総督の清水家を通じ政情報告し藩庁の処置を仰ごうとしたが、警戒した寺僧は清水家にはとりなさず役人へ通報。夜、寺僧は一席を傾けたいと罠をかけ、島田川にかかる千歳橋（チトセハシ）を渡るとき、急用があるのでと立石孫一郎を先に行かせ引き返した。寺僧のこの誘い出しは清水家の考えた策略である。橋の付近には清水家の家臣 17 人が立石孫一郎に対し銃を持ち隠れ身構えていて切り合い・銃撃し殺害した。翌朝早く、付近の農民が土手に上がってみると銃弾をうけた立石孫一郎の遺体があった。住民の一人があわれみ千歳橋傍らに墓石を、後には祠堂を建てて霊を弔った。

襲撃事件の結末

２年間の事件犠牲者数は立石孫一郎側 13 人、相手側 30 人になる。立石孫一郎亡き後の脱走兵の長州帰郷後の逮捕隊員数は 130 人、内刑死者数は 53 人を数える。長州藩からは厳しい扱いを受け、ひざ元の高杉晋作からは排除される悲惨な結末であった。

弱体化した徳川幕府を倒し新しい日本を築こうと熱い志を抱いた立石孫一郎だったが、残念ながら続いて行くものはなかった。没後２年目は明治維新、明治新政府が誕生した。立石孫一郎の死は土地の人々の同情を集め、その情けを慈しみ 70 年忌の昭和 10 年（1935）４月、光市島田村青年団は墓石側に碑を建てて顕彰している。

『君ハ石城山奇兵隊長ニシテ当時我藩ヲシテ速ニ倒幕ノ義兵ヲ挙ケシメムカ為掟ニ背キ慶応二年四月四日隊兵九十余人トトモニ同隊ヲ脱走、倉敷ニ出テ幕府ノ陣営ヲ打払ヒ帰国シタルヲ同年四月二十六日千歳橋上二於テ殺害サル

行年三十六歳　　昭和十年四月二十五日　　島田村青年団』

（注１）一部は４日から脱走し、全員が揃ったのが５日であったと思われる。

（注２）碑では九十余人となっているが、他の隊からの参加者及び脱落者などを含めると、総数 140 ～ 150 人になる。

※本稿は、６月 25 日開催の歴研サロンの講演内容を演者がまとめたものです。

法然、一遍から家康の浄土まで
－浄土教の流れを見る－

事務局長　*山田　良三*

鎌倉仏教と浄土教

鎌倉仏教は、それまでの平安仏教が公卿や貴族のための仏教であったものを、広く衆生の救済に道を開き、仏教のルネッサンスとも言うべき大改革を実現したものである。鎌倉仏教の始まりは美作国が出自の法然（源空、1133 ～ 1212）であり、日本の浄土宗の開祖となっている。浄土宗法然から、栄西（臨済宗）、親鸞（法然の弟子、浄土真宗）、道元（曹洞宗）、日蓮（日蓮宗）と様々な宗派の仏教者が続いたが、それらの鎌倉仏教を最後に締めくくったのが一遍（時宗）である。浄土宗は、阿弥陀仏の極楽浄土に往生し成仏することを説き教える浄土教の一派であるが、親鸞の浄土真宗や一遍の時宗もまた浄土教の教えである。

日本における浄土教の源流は、実践面では平安の中期に民衆に「南無阿弥陀仏」を説いて回った空也上人であり、教学面では恵心僧都源信とも言える。法然は源信の『往生要集』に強く影響を受け、専修念仏の教えを説いた。それに対して一遍は、「我が先達なり」として空也上人を非常に尊敬し、民衆の中に入っていき踊念仏を修して「南無阿弥陀仏」の教えを広めていった。「南無阿弥陀仏、決定往生六十万人」の名号札を配る賦算を続けながら阿弥陀信仰を広めて回り、遊行上人、捨て聖とも称される。

法然上人

令和６年（2024）は、法然上人による浄土宗開宗850 年という記念の年にあたる。法然は、平安時代末の長承２年（1133）に美作稲岡荘（現在の岡山県久米南町里方の誕生寺）に生まれた。15 歳で比叡山に登って天台宗の教学を学び、承安５年（1175）に、専ら阿弥陀仏の誓いを信じ、「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えれば以後は平等に往生できるという、専修（せんじゅ）念仏の教えを説くようになった。その教えはわかりやすく、平安末期の戦乱の続く乱世の時代に人々の心を捉え、公家や武士、一般庶民に至るまで多くの信徒を集めるようになった。建久９年（1198）には、九条兼実に請われて主著『選択（せんちゃく）本願念仏集』を著した。

しかし、旧仏教側は専修念仏を偏執の教えとして非難し、延暦寺や興福寺が顕密八宗を代表して専修念仏禁止を上奏した。建永法難（後述）により法然は流罪になったが、赦免後の建暦元年（1211）に帰洛し、翌年１月 25 日に 80 歳で東山大谷に没した。

法然と熊野信仰

法然が生まれたのは美作稲岡荘の漆間家であり、法然の母は秦氏君であった。誕生寺の北方 10km ほどの美咲町錦織に、秦氏にゆかりを持つ錦織神社がある。錦織は秦氏が多く住んでいた地で、秦氏に関係した伝承が多く残されている。

浄土宗史の研究家として知られる三田全信氏の『浄土宗史の諸研究』に、「平安中期の熊野に関する勘文を集めた『長寛勘文』の『熊野権現垂迹縁起』には、熊野権現の成立に渡来人の関わりを暗示していて、そのことの故か『法然上人行状絵図』には法然の熊野信仰に係る話が散見される」との記載がある。また三田氏は、法然 38 歳の嘉応２年（1176）に熊野本宮の別当湛増法橋が法然を招請したとの一文が残っていることから、当時は秦氏としての同族意識や帰属意識が残っていたからであろうとしている。

熊野と言うと熊野詣が有名である。平安から鎌倉にかけて、実に多くの歴代上皇の御幸が行われている。最も多いのが後白河上皇で 34 回、次に多いのが後鳥羽上皇で 28 回である。建永２年（1207）、後鳥羽上皇の熊野御幸中に都に残った女御が法然の弟子によって出家したとして、弟子４名が死罪になり、さらに師の法然の土佐配流（九条兼実の配慮により讃岐に変更）やその弟子親鸞の越後配流がなされた。これを建永法難と言っている。

法然は熊野三山を詣でたことはなかったとされているが、熊野信仰には深い関心を持っていたようである。法然が配流される前に熊野権現が夢に現れ、「かの上人は勢至菩薩の化現である。疑ってはならぬ」と告げたという話がある。また、配流先に向かう途中で船が嵐に遭った時に、熊野権現が船を守ってくれたという話もある。

一遍上人

一遍上人は延応元年（1239）、伊予国の道後温泉の奥谷の宝厳寺で河野道弘の子（母は大江氏）として誕生した。ちょうどこの年は後鳥羽上皇が隠岐で崩御した年にあたる。河野家は越智氏の流れを汲む豪族であり、西国の諸豪族が平家傘下にある中で、源平合戦の折、一遍の曾祖父河野通清が一族を率いて源氏に付くことにより、平家追討に功があったとして伊予国における有力御家人になっていた。

ところが、承久の乱（承久の変）が勃発したことにより河野氏の運命が変わることになった。承久の乱は、承久３年（1221）に後鳥羽上皇が鎌倉幕府執権の北条義時に対して討伐の兵を挙げて敗れた兵乱である。承久の乱において一遍の祖父通信をはじめ一族の多くが上皇方に付き、上皇方が敗北。上皇は隠岐に流され、上皇方の諸武将は各地に流罪になり、一遍の祖父通清や叔父通末なども流罪となった。河野本家は、通信の子の道久が幕府方に付いていたため、かろうじて命脈は保たれたが一遍誕生当時の河野家はすっかり没落してしまっていた。

一遍上人

一遍の父の道広は承久の乱の時には出家していて如仏と称し、法然上人の代表的な弟子の一人で、浄土宗西山派の祖である証空のもとで修行していた。道広は乱の当時には伊予に帰っていたこともあり、戦には参戦せず、一族の中では命を長らえることのできた一人であった。証空は法然の重要な弟子であったため、建永の法難で遠流が決まっていたが、当時叡福寺の願蓮のもとにあったため実刑を免れた。師の法然没後に慈円から西山善峰山の往生院を任され、後に西山上人と呼ばれるようになり、浄土宗の中でも重要な西山派の法統を形成していた。証空の教えを伊予で受け継いだのが一遍の父道広（如仏）であった。如仏が伊予に帰り、還俗して生まれたのが一遍（幼名松寿丸）である。

河野氏と備前国との密接な繋がり

河野氏は瀬戸内随一の水軍を擁し、伊予国の有力御家人となり、瀬戸内各地の有力豪族と縁戚関係にあった。中でも備前国の有力豪族との関係は深く、後醍醐天皇に忠誠を尽くした児島高徳の正妻は河野氏の女貞子であったことはよく知られている。また、高徳の娘は河野氏の一族である越智氏に嫁しているなど、深い関係を結んでいた。太平記には、児島氏（三宅氏）や高徳が養子になった和田氏などは河野氏と同族であると書かれている。備前児島はこの頃熊野権現の所領であったが、河野家とは深い繋がりを持っていたのである。

一遍の出家と修道の道

松寿丸が 10 歳の時に母が病没し、父の勧めで松寿丸は出家した。13 歳の時に証空の弟子の聖達上人を訪ねて大宰府に赴き、約 10 年間大宰府を中心に修学を続けた。弘長３年（1263）、父が亡くなったので故郷伊予国に帰り半僧半俗の生活を送っていたが、一族間で争いが起こり再出家を決意したという。文永８年（1271）32 歳の時に弟とともに大宰

府で再出家した。その後信濃の善光寺で参籠、伊予の窪寺を経て、34歳の時に菅生の岩屋寺で参籠後伊予を離れ、一切を捨てた「捨て聖」として諸国遊行の旅に出立した。

同行者３人（超一、超二、念仏坊）とまず向かったのが熊野権現であり、途中の桜井まで弟の聖戒も同行した。途中四天王寺で修行し、さらに高野山などで修行、念仏勧進の願を立て、「南無阿弥陀仏」の札を配る賦算を始めた。熊野権現に向かう途上の熊野山中でとある僧に出会ったが、その僧が「信心が起こらないので受け取れない」というのを無理に札を渡したことを心に悩み、熊野権現本宮に詣でて伺いを立てたところ、「信不信を選ばず、浄不浄を嫌わずその札を配るべし」とのお告げを受けた。ここから「南無阿弥陀仏」に「決定往生六十万人」の８文字を加えて賦算を始めることとなった。この頃、この賦算札の版木を弟の聖戒に送ったことが絵伝の詞に書かれている。この時から一遍と号するようになった。一遍の信仰の特徴として、伊勢や熊野などの神祇信仰と親和的なことが指摘されており、特に熊野権現との関わりは深い。

九州遊行、伊予・安芸・周防から備前に

熊野を出た一遍は同行者を一旦伊予に返し、自らは京に赴いて誓願寺に詣り、師聖達の継子顕意を訪ねた。その後西海道を経て文永の役（元寇）後の博多を訪ね、戦死者の供養をなした後、伊予に帰った。伊予では国内くまなく賦算し、巡錫して回った。

建治２年（1276）、再び伊予を発ち、大宰府に師聖達を訪ね、その後九州各地を遊行して回った。豊後では、後に有力な弟子の一人になる真教が入門している。弘安元年（1278）に同行７～８人とともに伊予国に帰った後、秋に伊予を出立、最初に安芸厳島に詣で、周防国を回った後に備前国福岡に至った。

この頃、一遍の一行は瀬戸内海の航海を河野水軍の船で移動したのであろうと想像される。河野氏は承久の乱後に一時落ちぶれていたが、元寇の役に河野水軍が武功を立て、鎌倉幕府からその功を認められて勢いを盛り返していた。そのような状況から、瀬戸内海各地への巡錫は河野の船で移動したのではないかと思われるのである。

一遍は備州を何度か訪れているが、一番代表的なのが弘安元年（1278）の備前福岡市である。その様子を描いた絵は一遍上人絵伝の中でも代表的なもので、当時の市場の様子を知る貴重な題材として歴史教科書にも掲載されている。弘安８年（1285）には丹後から伯耆を経て美作の中山神社に来ている。その後弘安10年（1287）に備中軽部の宿に滞在した記録が残る。この時に安養寺を訪問したであろうと思われる。そして、備後吉備津宮に詣でた後に故郷に帰っている。

最後の旅路は正応２年（1289）であり、伊予国を出て、法然上人にもゆかりの善通寺を訪ね、阿波から淡路を経て兵庫に至り、この地（和田岬の観音堂）で往生したのであった。一遍は臨終に際して所持の書籍などすべてを焼却したとされ、著作は残っていない。時宗は南北朝時代に飛躍的な発展を遂げたが、次第に浄土真宗に取って代わられ衰退していった。

徳川家と浄土宗

戦国時代を終わらせた武将が徳川家康である。徳川家はその後代々続き、日本の歴史で最も長い265年間戦乱のない平和な時代を実現した。その徳川が戦国の戦いの時代に旗印としたのが「厭離穢土欣求浄土」である。大河ドラマでも目にした人は多いであろう。「厭離穢土欣求浄土」とはどういう意味なのか。また、どのような経緯で徳川家の旗印として使用されるようになったのだろうか。

徳川家のルーツは清和源氏で（注）、八幡太郎義家の末裔とされる上州得川出身の時宗遊行僧・徳阿弥が、還俗して三河の庄屋・松平太郎左衛門重信の婿養子になり、松平親氏と名乗ったのが始まりである。文明７年（1475）に松平家４代目の松平親忠が、増上寺より勢誉愚底を招いて現在の愛知県岡崎市に大樹寺（浄土宗）を創建し、松平家の菩提寺とした。徳川の姓の由来は、家康が初代の得川の姓の得の字を徳にあらためたのが始まりである。

厭離穢土欣求浄土（おんりえどごんぐじょうど）

後に徳川家康と名乗る松平元康は、岡崎城主であった。しかし、幼少時から今川家に人質として預けられ、成人してからも今川の家臣として扱われて

いた。ところが、上洛を目指していた今川義元に従って桶狭間にあった時、織田信長の急襲により今川軍は敗北し、義元も討ち死にすると今川勢は散り散りばらばらになった。元康は岡崎へと逃れ、松平家菩提寺の大樹寺に至った。桶狭間での敗戦に悲観した元康は、松平家代々の先祖の墓前で切腹しようとしたが、その元康を当時の大樹寺住職の登誉上人が「厭離穢土欣求浄土」の話をして思いとどまらせた。「厭離穢土欣求浄土」とは、穢れた世を離れ万民が幸福に生きる世を実現するという意味である。上人は元康に「天下の父母となって万民の苦しみを無くしなさい」と教え諭したのである。南無阿弥陀仏の心であった。

以来家康は旗指物に「厭離穢土欣求浄土」と掲げ、口には念仏「南無阿弥陀仏」を唱えながら、浄土の実現を期して戦国の世を戦い抜いたのであった。徳川の時代が世界にも類例がない 265 年の平和で豊かな時代を実現した背後には、このような徳川家の歴史と込められた浄土の教えがあった。

浄土の教え、特に専修念仏の教えを広めたのは郷土岡山の生んだ偉大な聖人法然であり、その法然の門弟である証空の弟子聖達を師としたのが時宗の開祖一遍である。その時宗の遊行僧であった徳阿弥が徳川家のルーツになったことにより、法然由来の浄土教の流れが徳川に伝わり、その理念が 265 年の平和につながったのである。

（注）徳川が清和源氏の嫡流を汲むというのは、家康が将軍になるために偽作・付会したと言われる。

歴研サロン、順調に開催される（会場はすべてゆうあいセンター）

4 月 30 日（日）

「緒方洪庵適塾の門人達　妻・八重　緒方郁蔵」

講師　大濵文男 氏（会員）

参加者 12 名。江戸時代末期、足守藩出身の緒方洪庵（1810 ～ 1863）が、1838 年（天保 9 年）大阪で蘭学塾の「適塾」（大阪市東区北浜 3 丁目）を開き、幕末から明治維新にかけて日本の歴史を築いた多くの人材を輩出したことは、周知のとおりである。洪庵自身、適塾の設置者であると同時に、オランダ医学書を訳すなどして適塾での蘭学の指導者でもあった。

適塾の門人姓名録には 730 余人がおり、その中には、福沢諭吉、津下来吉、横山謙斎、佐藤静安、藤井省三、別府琴松、妹尾遊玄、橋本左内、大村益次郎ら著名な門人達もいた。大濵講師の妻の祖父もその中に名前を連ねており、大濵講師も妻との出会い（1954 ～ 2009）を通じて、実際に適塾の運営を支えていたのは、洪庵の妻八重や義兄弟の緒方郁蔵をはじめとする門弟たちであることを痛感されたとのこと。

特に八重夫人が大切にしてきたことは、人として生まれてきた生命の尊さ、すなわち「愛」であり、門下生＝「皆がわが子」という強靭な信条であった。門下生たちも八重を母として敬い、尊敬の念を強く抱き、大地のような母といわれて慕われていた。八重夫人は、洪庵の業績、適塾運営に不可欠な「影の存在」であった。洪庵と八重夫人には、多賀、整之輔ほか 10 人の子供たちがおり、「門下生皆がわが子」と併せるとき、想像を絶する苦労がしのばれるとのことであった。

いずれにしても適塾は、蘭学という新しい科学文明を受け入れるべきという寛容な進取の気性を持った洪庵が開いた塾であるが、その背後にはそれを支えた影の存在が大きかったということであり、大濵講師ならではの貴重な講話であった。

（板野忠司）

5 月 28 日（日）

「造山古墳石棺になぜ阿蘇石を使用するのか　造山古墳の埋葬者大吉備諸進命（おほきびもろすすみのみこと）説」

講師　丸谷憲二氏（会員）

県内を中心に独自の古代史像を探究している丸谷憲二氏が、造山古墳の被葬者について新たな見解を発表し、24 名が熱心に聴講した。

丸谷氏と苅田万澄氏（黄蕨（きび）の会）は、造山古墳の石棺が熊本県阿蘇山の溶結凝灰岩であることを手がかりに吉備と阿蘇の関係を調査し、造山古墳の埋葬者が大吉備諸進命（吉備津彦命の父）であると推定した。また、造山古墳の陪塚である千足古墳の埋葬者は吉備津彦命の子の三井根子命（みいのねこのみこと）であるとした

『先代旧事（くじ）本紀』（注）の「国造本紀」によれば、古代阿蘇は阿蘇国と葦分国の２つに分かれており、纒向日代朝（景行天皇）の時、葦分の国造が吉備津彦命の子の三井根子命であったという。吉備津彦命の子にとって最も大切な吉備の人物は吉備津彦命の父、大吉備諸進命である。大吉備諸進命は『古事記』では孝霊天皇の兄であるが、『古事記』の書写過程で「兄の業績」が消されたのではないかと考えた。

なお、『古事記』では孝霊天皇の時に大吉備津日子命と若建吉備津日子命を吉備へ派遣し、『日本書紀』では崇神天皇の時に四道将軍の一人として吉備津彦を西道（後の山陽道）に派遣したとあるが、四道将軍として派遣された吉備津彦は、大吉備諸進命の血縁者ではない。出宮徳尚氏は、崇神紀の吉備津彦は孝霊記の大吉備津日子命と同一人物視されているが、崇神紀では五十狭芹彦命（いさせりひこのみこと）（吉備津彦命の別名）に命（尊称）付けにしているのに対して吉備津彦には命付けがなく、両者を別人扱いしていると解釈できるとしている。

吉備国の祖父（大吉備諸進命）が亡くなった時に、阿蘇石の石棺を吉備まで運んだと推定した。『先代旧事本紀』巻７に「豊国別皇子　吉備別の祖」とあるなど、九州には吉備と関係の深い国造が多い。

造山古墳は５世紀前半の築造とされる。舟形石棺があり、材質は阿蘇山の溶結凝灰岩（馬門石）で、石棺は灰黒色、蓋の内面の朱色は阿蘇黄土（リモナイト）を焼いたベンガラである。柔らかい石なので、鉄がなくてもサヌカイトで刳り抜き加工できる。

中根洋治氏らによれば、古墳時代に巨石を運搬する方法として、梃子による巨石持ち上げと修羅（自然の股木を使用したＹ字型の橇）の使用、海上の長距離運搬は浮力を利用（天地逆）して水中を二艘の舟で吊して運んだという。造山古墳になぜ遠隔地の阿蘇石を使用したのか。それは、数トンに及ぶ阿蘇石を運搬する様子を見せることによる、権力交代の誇示である。

千足古墳の石室は、四壁に沿って直弧文がある。古墳の埋葬施設の直弧文は 10 例発見され、もと葦分国の熊本県宇土半島に５例、福岡県筑後平野西部に３例、岡山県に２例である。宇土市のヤンボシ塚古墳は千足古墳の石室とそっくりで、同一工人集団によるものとされる。埋葬された人物は、吉備氏を支えた有力者で宇土の出身者か宇土と何らかの関係があった人物であろう。このことと葦分国造が三井根子命であったことから、千足古墳の埋葬者を三井根子命と推定したとのことであった。

講演後の質疑応答の中で、造山古墳の被葬者が大吉備諸進命であるとの推定は、考古学から言えば先走りし過ぎているのではないかとの指摘があった。これに対して演者からは、「古墳に関して一般の人が知りたいのは被葬者が誰かということであり、そのための試みである」との見解が示された。本講演内容は、史料の新解釈による独自の説の呈示であり、造山古墳の被葬者を考える上で新たな一石を投じたものになった。ただ、推論過程に若干の無理がある部分もあるように思われ、今後の更なる検討による進展が期待される。

（注）『先代旧事本紀』（10 巻）の序文には聖徳太子撰との記載があるが、『古事記』、『日本書紀』、『古語拾遺』からの引用が大半であり、その成立は『古語拾遺』が編纂された大同２年（807）以降である。尾張氏、物部氏の系譜を収める「天孫本紀」（巻５）と、独自の所伝がある「国造本紀」（巻 10）は貴重な史料と言える。江戸時代に、72 巻本の『先代旧事本紀大成経』が出版されたが、偽書とされている。

（井上知明）

6 月 21 日（水）

「歴史から見た広島県と岡山県の県民性の違いについて」

講師　楠　敏明氏（会長）

参加者 17 名。7 月 10 日に楠会長が、広島の岡山県人会の依頼で、歴史から見た広島と岡山の県民性をテーマに講演することになり、それに先だって会員の皆様にも聞いてもらいたいとの趣旨で、特別回として開催。

6 月 25 日（日）

「倉敷代官所・浅尾陣屋襲撃事件」

講師　工藤　博氏（会員）

参加者 26 名。倉敷美観地区のボランティアガイドで地元の歴史に詳しい工藤講師が、慶応２年４月の立石孫一郎らによる標記襲撃事件の真相について解説された。

※この講演を元にした工藤氏の論考を本号に掲載しました。

7 月 29 日（土）

「地域に夢を与えた三蟠鉄道の社会貢献　－にも関わらず、何故短命に終わった－」

講師　内田武宏 氏（会員・三蟠鉄道研究会会長）

会員で三蟠鉄道研究会会長の内田武宏氏が表記講演を行い、17 名が熱心に聴講した。

三蟠鉄道は、大正４年８月に旭川下流東岸の三蟠から桜橋駅までが開通し、貨客混合列車が走っていた。桜橋駅近くの岡山瓦斯や鐘淵紡績の工場に石炭を運び、女工さんや海水浴客などにも利用され、地域に貢献した。大正 12 年には国清寺駅まで延伸された。

大正 13 年にドイツ製の蒸気機関車コッペルを導入するなど、集客に励んだが、昭和３年に岡山市で開催された大日本勧業博覧会後に水族館の払い下げを受けて運営し、大失敗に終わったことや、旭川改修による船便の影響などにより、経営が厳しくなった。

昭和６年４月１日に上道郡平井村が岡山市に併合され、市の都市計画を受けて、鉄道用地の買収に応じることになり、同年６月末に営業を廃止。29 回もの清算人会議が開催され、精算配当もきちんとなされたという。

※三蟠鉄道については、会報 36 号の記事も参照してください。　（井上知明）

8 月 29 日（火）

「日本貨幣の今昔」

講師　大河原　喬 氏（副会長）

参加者 24 名。大河原講師は、日本の歴史をたどりながら、それと密接に関連する貨幣の歴史を語られた。縄文時代の採集生活や弥生時代の水田耕作では、原始共産制で現物を分け合うことで貨幣は不要で、古代吉備国でも桃太郎伝説とも符合する温羅が持っていた鉄づくりの技術も貨幣鋳造には至っていなかったとのこと。

日本で最も古いとされるのが、1999 年に奈良の飛鳥池遺跡から出土した「富本銭」であるが、富本銭は７世紀後半中国の銭貨を手本にしたものの、

流通の実態が明らかではなく、貨幣といえるかとのこと。その後、武蔵国から自然銅が発見され、708年元明天皇のもとで鋳造された「和同開珎（注）」（銅銭及び銀銭）が、蓄銭叙位令のもとで畿内中心に我が国で流通した貨幣といえる。爾来、平安時代まで2世紀半にわたり12種類の銭貨、「皇朝十二銭」が造られたことが詳しく解説された。鎌倉時代後期には、宋から輸入された宋銭が使用され、室町幕府は割れたビタ銭、すなわち粗悪通貨も通用させたとのこと。織田信長の頃になると同業者のギルドである楽市楽座の取引で銅銭などが使われ、さらに　江戸時代になると、家康は、大判、小判、一分金、丁銀、豆板銀の5種類の金銀貨を発行し、家光によって銅銭の「寛永通寶」がつくられた。

武士と商人の複雑な経済組織の中で、江戸は金、大阪は銀の変動相場制で、秤に分銅を持った両替商まで現れた。金は江戸で表記貨幣、銀は大阪で秤量貨幣となり、元禄以前は金一両が銀で50匁、元禄以降は60匁というような時代であった。金貨も金の含有量で40%､50%､60%と各種あった。大阪から蔵米を扱う商人が、東京の両国（墨田区）に船で運び、大判小判などの金・銀の通貨で決済した。

明治新政府になってからは、政府紙幣が発行され、円･銭･厘の10進法の通貨となり、大正になってからは、金本位制との関係で金解禁のもとで兌換紙幣の発行、またその逆に戦費調達のため不換紙幣が発行されてインフレを招くなど、国家財政との関係で通貨に対する信用が問題となった。昭和には先物取引が導入、戦後はGHQにより1ドル360円の固定相場制が採用され、1971年からは世界の主要通貨は現在の変動相場制に移行した。日本史と貨幣の変遷をめぐるユニークな興味深い講演であった。

（注）「和同開珎」は昔は「わどうかいほう」と読んだが、現在では「わどうかいちん」の読みが一般的である（珎は珍の異体字）。「わどうかいほう」と読んだのは、「珎」を「寶（宝）」の俗字「寳」のウ冠と貝とを省略して刻字したものとみて読んだもの。（板野忠司）

9月5日（火）

「大和の斑鳩と播磨の鵤　さらに備前岡山池田氏との繋がり」

講師　小川　肇氏（会員・奈良ソムリエガイド）

参加者20名。斑鳩も鵤も、「いかるが」と読み、本来「イカル」はスズメ目アトリ科の鳥であるが、その鳥の群遊から、「いかるが」は地名となり、そこが聖徳太子に関係があったことから、荘園制度ともからみ、奈良県生駒郡斑鳩町を指すようになった。斑鳩寺といえば奈良県の法隆寺の別称となり、さらに鵤寺（斑鳩寺）といえば、播磨国内兵庫県揖保郡太子町の法隆寺領管理のための子院をも指し、やはり聖徳太子の寺の代名詞となる。

聖徳太子の呼称は、その死後、生前の行状、功績等から付せられたものとされており、日本書紀の中では「厩戸（うまやど）皇子」であった。聖徳太子は、飛鳥で誕生したが、やがて宮殿のあった推古天皇の宮から離れ、斑鳩の地に自らの斑鳩宮を建設、推古天皇の住む飛鳥（現在の明日香村）の小墾田宮へは、太子道と呼ばれる道を馬に乗って通っていたとのこと。そして推古天皇の摂政という立場から、仏教の教えを基とする国づくりを目指し、十七条憲法や冠位十二階を制定し、この「斑鳩の里」に斑鳩寺（後に法隆寺）を建立した。

一方、播磨の鵤は、古代に法隆寺の荘園として鵤荘が成立して以来、現太子町のこの区域が聖徳太子ゆかりの御領地（同じく「斑鳩の里」）となり、斑鳩寺講堂、三重塔、聖徳殿などがある。なお、備前･備中には、「斑鳩の里」と称される地名はないものの、播磨国の鵤藩の当主は池田重利であり、重利（当時は頼広）の父下間頼龍の死去により下間家では後を継いだ頼広の母の七条が、姫路城主であった義理の弟・池田輝政のもとに身を寄せることになり、系図上でも聖徳太子ゆかりの「斑鳩の里」と備前岡山池田氏との繋がりがあることが解説された。

イカルガと池田氏を通じて、奈良、播磨、備前との関係が深まり、聖徳太子との関係までがより身近に感じられるロマンあふれる講演であった。（板野忠司）

歴研探訪会「京都・謎の秦氏ゆかりの地を訪ねる」

工藤　博（会員）、*山田良三*（事務局長）

コロナ禍で長年休止していた歴研恒例の貸切バスによる歴史探訪会が、令和５年５月 26 日に開催された。探訪会のテーマは、岡山にも関連する「謎の秦氏ゆかりの地を訪ねる」で、探訪先は京都市である。

参加者は 48 人、案内は山田良三事務局長と板野忠司運営委員の２人。開催の２か月前には秦氏に関する異例の事前勉強会も設け、万全の態勢で臨んだ。

探訪コースは松尾大社～広隆寺・大酒神社～護王神社～伏見稲荷大社とその周辺の京都市内を巡った。

松尾大社

最初の訪問地は松尾大社。秦氏が祀ってきた氏神で、古くから信仰されてきたが文武天皇の大宝元年に、秦忌寸都理（はたのいみきとり）により現在地に社殿が造営されて今に至るとされる。京都の西を守る神として篤く信仰されてきた。中世以降は秦酒公（はたのさけのきみ）に因むとされてか、酒造家の信奉を受けて来たことでも知られている。

この後時間の関係で行けない愛宕山を、やはり秦氏が灌漑を行った嵐山から遠望して、太秦の広隆寺へと向かった。

松尾大社にて

広隆寺・大酒神社

秦氏が建立したのが太秦（うずまさ）の広隆寺で、日本の国宝第一号に指定された弥勒菩薩像が本尊である。大酒神社は秦の始皇帝、弓月の君、秦酒公、呉織神、漢織神を祀っている。近くには、三本鳥居で有名な蚕ノ社（木島（このしま）神社）など、秦氏の独自の信仰を物語る遺跡もある。時間の関係で蚕ノ社には立ち寄れなかった。

広隆寺弥勒菩薩半跏思惟像

護王神社

京都御所の前にあるのが、京都を作った和気清麻呂を祀る護王神社である。京都は、和気清麻呂が桓武天皇のもと秦氏の全面的協力を得て造られた都である。降りて参拝はできなかったが、京都の町が郷土ゆかりの人物とも深い繋がりがあることを改めて確認することができた。バスは御所の北側の相国寺と、もともと相国寺の土地だったところに建てられたという同志社大学の前を通り、郷土出身で秦氏の出自とされる法然ゆかりの知恩院前を通って、伏見稲荷に向かった。

伏見稲荷大社

山背に居住した秦氏の中でも代表的な一族が、この地深草に創建したのが伏見稲荷であり、全国の稲荷社の総本社になる。

今回は、歴研十周年記念講演会で講演していただいた槇野博史前岡山大学学長も参加された。当

伏見稲荷大社

日は早朝６時30分発、帰着20時30分のバス旅行往復440㎞余り、昼食はバス車内、ドライバーは２人という歴研初の強行軍探訪会であったが、ケガ、トラブルなく全員安全に一日を過ごすことができたのは何よりだった。

秦氏に関しては歴研でも以前に関連講話や書籍紹介等がなされ、また今回は事前勉強会も開催されて十分認知されてはいるが、実際にゆかりの現地を秦氏の観点で見た人は殆どなく、２人の名案内で理解が更に深められ、今後の秦氏研究に大いに寄与するところがあったのではないだろうか。

ニュース

第４回「定説への叛乱　岡山・東京歴史シンポジウム」開催（協賛行事）

５月６日、７日に蔭涼寺（岡山市北区中央町）において、「古代日本の前方後円墳から天皇制まで謎は吉備（岡山）からしか解けない」との主題で開催されました。

広島の岡山県人会で講演

７月10日に楠会長が、広島の岡山県人会から招かれて「歴史から見た広島県と岡山県の県民性の違いについて」の演題で講演し、大変好評でした。また当日、参加者に岡山歴研10周年記念誌15冊を購入していただきました。

来日韓国歴史探訪グループをサポート

７月13日から16日までの４日間、山田事務局長を中心に会員有志が、韓国から来日した東アジア古代史探訪グループの県内史跡探訪をサポートしました。

埼玉県からの歴史研究者と意見交換

９月８日に丸谷運営委員が、歴研のホームページを見て聖徳太子の時代の吉備を知りたいと埼玉県から来県した池上宏之氏と意見交換しました。

編集後記

司馬遼太郎が幕末の長州藩について、「幕末における長州藩の暴走、狂躁ぶりというのは、寒気がさすほどのものだ。その暴走が奇跡的に成功した。幕末における国内事情、国際事情が、この暴走をして、万に一つの奇跡的成功をおさめしめたのである」と書いている。本号に掲載した工藤博氏の論考の主人公である立石孫一郎こと大橋敬之助は長州人ではないが、奇兵隊の中の更なる過激派であった。自らの信じる正義のためにテロ行為に走り、最後は長州藩にも見捨てられた立石孫一郎は、まさに幕末という激しい変革期の徒花（あだばな）であったと言えるのだろう。

宗教史に詳しい山田良三氏による「法然、一遍から家康の浄土まで」は、法然に始まった浄土教の教えが、一遍を経て家康の「厭離穢土欣求浄土」、江戸時代265年の平和にまで繋がった流れを追ったものである。法然や親鸞に比べると知名度の低い一遍について詳しく知ることができ、熊野権現との関係などについても触れられている。

その他には、５月26日に開催された歴史探訪「京都・謎の秦氏ゆかりの地を訪ねる」の報告や、４月から９月までの歴研サロンの報告などを掲載した。

（井上知明）

発　行　岡山歴史研究会
会　長　楠　敏明
編集長　井上知明
事務局　〒700-0973 岡山市北区下中野350-121
コーポ東浦北棟202　山田良三方
電　話 090-1033-3327（携帯電話）
ＦＡＸ 086-806-2525
メール rekiken.okayama@gmail.com
ホームページ http://b.okareki.net/